

音は語る

文 藤盛一朗



連載 40

ブラームスの2番に戦争の影 「私たちに平和を」兵士の叫び



ブラームスの交響曲第1番、第2番の公演で演奏するギルバート指揮都響
© Rikimaru Hotta

ギルバート指揮都響 演奏の不意打ち

ブラームスの交響曲第2番には、解き放たれた喜びがある。偉大なベートーヴェンの影もあつて21年を要した交響曲第1番の創作を終えたこと。オーストリア・ヴェルター湖畔の自然……。だが、アラン・ギルバートが7月19日に指揮した東京都交響楽団のツィクルスでの演奏(サントリーホール)では、不意打ちにあつた。第2楽章の再現部の表情が暗い。トロンボーンとチューバの吹奏は、道を失つたような不確かさを感じさせる。思い起こしたのは、80年前のフルトヴェングラーの演奏だった。

フルトヴェングラー スイス脱出前に異様な表現

第2次世界大戦下の1945年1月。ナチス指導部と亀裂の深まったフルトヴェングラーは、命の危険を察し、ひそかにスイスへの出国を決意した。その直前の1月28日、ウィーン・フィル定期でのブラームス2番の録音が残る。フルトヴェングラーならではの抑揚と振幅の激しい演奏だが、異様なのは、第2楽章再現部55小節からの第2トロンボーンとチューバ。ピアノの指定を無視し、大きく吹かせ、さらに1小節中のクレッシェンドとデクレッシェンド指示をデフォルメのように強調する。続く60小節も同じ。身震いがする。明らかな意図をもってそう演奏させている。ゲシュタポに逮捕されるかもしれないフルトヴェングラー自身の不安を映しているのだろうか。全体を聴き直してみると、第1楽章冒頭の4本のホルンの吹奏や第1ヴァイオリンがドルチェで奏でる主要主題は、この曲の初演楽団であるウィーン・フィルの演奏の美しさの極みと感じられる。第1楽章コーダのホルン独奏も、深い味わいがある。フルトヴェングラーの胸には、楽団との惜別や、もしかするともう二度と指揮はできないかもしれないという思いがよぎっていたかもしれない。



1945年1月28日のウィーン・フィル定期を指揮したフルトヴェングラーのCDジャケット

激しいテンポの揺れは、実は見事に統御されていると感じられた。終楽章コーダは、最弱音に沈み込んだ後、猛烈なアツチエランドをかけ、最後は輝かしいニ長調の頂点を築く。まさにフルトヴェングラーの強靱な意志がのぞく。

今回の都響のブラームス・ツィクルスも、2番の第3楽章、3番第2楽章の木管の味わいや終結部での弦による感情の高揚など、聴きどころはたくさんあった。だが、「ブラームスの田園」とも称される第2番の演奏で不安の響きが強烈な印象を残したのは、戦争が続く今の世界状況があるからだと思われてならない。

戦争の実相を如実に

この夏は、ノット指揮東京交響楽団と、佐渡裕指揮兵庫芸術文化センター管弦楽団が相次ぎ、ブリテンの《戦争レクイエム》を取り上げた。どちらも2025年の今、平和構築のメッセージを放つ演奏となった。

1962年に英国で初演されたこ

の作品は、戦争犠牲者の単なる追悼ではない。オーウェンによる詩と、レクイエムの典礼文の組み合わせによる曲は、人が殺し合い、血を流して命を落とす戦争の実相をありありと示す。その主題は、戦争の告発であり、平和の希求。そして、作曲時には、第2次世界大戦で敵対した者や国同士の和解も強く意識されていた。

バリトン独唱が歌う「たくさん血が戦車の車輪を塞ぎ止めたとき」(小宮正安訳)という詩句は、実にむごたらしい。戦車は砲弾を放つだけではない。兵士が潜む塹壕の上を走る残酷な戦術もある。ブリテンが採用したオーウェンの詩は、殺される兵士たちの姿を如実に想像させる。そして、

そうした塹壕戦は、21世紀の今も、ロシアの侵攻を受けたウクライナで続いていることを想い起こさせる。この音楽は、まったく過去のものではないのだ。

だが《戦争レクイエム》は祈りの曲である。「僕は進んで甘美な井戸水で車輪を洗おう」と続く詩は、すでに浄化の気配を漂わす。「甘美な井戸水」戦争で僕らが奥深く沈めた井戸水」とは、キリスト教がいう生命の泉であり、罪を清める水の意味が込められている。それをもって洗うことで、「僕は君



《戦争レクイエム》を演奏するノット指揮東響
(7月19日、ミューザ川崎シンフォニーホール © 平館平 / TSO)

が殺した敵さ、友よ」という、殺し合った兵士の死後の世界の再会と和解に物語は進む。「さあ、ともに眠ろう」。バリトンと、テノール独唱とともに歌う場面は、悲痛だが、美しい。

レクイエムは死者の安息を祈る。《戦争レクイエム》では、合唱とソプラノ独唱が歌う典礼文はラテン語。2人の兵士の男声は、英語をテキストとする。だが、この原則が崩れ、テノールがラテン語で叫ぶように歌う文句がある。「*don nobis pacem*」。レクイエムにはない、ミサ典礼の言葉、「私たちに平和を与えてください」をブリテンはあえて兵士に歌わせる。ノット＝東響の演奏は緊張感に貫



《戦争レクイエム》を演奏後、拍手を受ける佐渡裕指揮兵庫芸術文化センター管弦楽団や出演者(兵庫県立芸術文化センター © 飯島隆)

かれ、ホールを聖堂の空間に変えてしまったようだった。「怒りの日」の激しい表現は、戦争を繰り返す人類の罪深さに向けられていると感じられた。初演時のブリテンの構想通り、英国、ドイツ、ロシアの歌手たちを招いた意義も大きかった。

佐渡＝兵庫芸術文化センター管の演奏は、一般公募とプロ混交の合唱の表現が、冒頭から大きな力をもって客席に訴えかけた。8月9日の長崎原爆の日の演奏は、「永遠の憩いを与えてください」という祈りが心に響く。終結の「アーメン(心から祈ります)」も、実に深い響きだった。戦後80年といっても、ウクライナやガザでは戦闘と人々の死がやまない。師のバースタイン譲りの、社会や歴史にアンテナを張った佐渡の入魂の演奏だった。

シヨパンのソナタ3番 安らぎと個の尊厳と

8月という特別な時の演奏では、12歳からモスクワで学んだ若手の奥井紫麻のシヨパンのピアノ・ソナタ第3番も、鮮烈な印象を残した(8月1日、Hakuj Hall)。ロシアの音楽教育の伝統では、演奏を通じて何を伝えるかを意識し、楽想のイメージを明確に意識することが重視される。奥井の第3楽章の演奏からは、シヨパンがいとおしんだ安らぎが、ポーランドの美しい湖沼や水面をわたる風のイメージとともに伝わってくる。その安らぎは、平和という言葉に置き換えることもできるだろう。

第4楽章プレスト・マ・ノン・タントの推進力と力強さ。不屈の個という言葉が思い浮かぶ。なににも侵されてはならない人間の尊厳。出口なしともみえる世界状況の中で、私たちが平和に向かって鼓舞するような力すら感じさせる演奏となった。



奥井紫麻 © Evgenii Evtukhov